

はじめに

西 成 彦

連続講座はシリーズの企画は、1994年から始まり、8回にわたり「国民国家と多文化社会」という総題のもとでさまざまな試みを企ててきました。その9回目が「複数の沖縄」です。はじめは「ヨーロッパ統合」、次は「多元主義カナダ」「ポスト・アパルトヘイトの南アフリカ」「オーストラリアの鏡・日本の鏡」「アジアにおける国民統合とエスニシティ」「国民国家とアジアの現在」「国民国家の狭間の南アジア」。昨年は「向こう岸からの問い」と題して「ラテンアメリカ」を中心にしたシリーズを実施しました。今日からが9回目になります。連続講座でのこれまでの取り組みの成果は人文書院から3冊の書物にまとまっています。この6年間の流れの中で、今までで欠けているのはどこかという問いからこのシリーズの立案は始まりました。その結果、なまじ国際という名前が頭についていることをいいことに、日本周辺をおごなりにしてきた反省を踏まえて今回は沖縄、次回は台湾、それから後も朝鮮半島、アイヌの問題、日本列島の中のマイノリティの問題の方向にも取り組む可能性を考えています。

立命館大学の中で沖縄をテーマにしたものはこれが最初ではなく、人文科学研究所で産業社会学部佐藤嘉一先生を中心に「移住と社会的ネットワーク」と題して、沖縄の今帰仁村をフィールドワークの対象とし、ケーススタディを踏まえたプロジェクト研究があり、人文研の紀要として3年前に発表されています。ミクロなものにグローバルな視点を持ち込むという画期的な研究であったと思います。そういう流れをくみ取りながら「複数の沖縄」をテーマに、日本研究、世界史の研究、文化研究の枠組みの中で、沖縄という固有名詞のもとに何を見いだして、どう問うていくのかという可能性を探る機会として、これからの1か月間を有効に利用したいと考えています。連続講座では沖縄について考えている人、沖縄で考えている人、沖縄に住んでいる人、沖縄の未来

を考えている人、沖縄県民として考えている人、沖縄から目をずらして周囲を見ようという考えを持っている人の中から6名をお招きして講演をいただき、コメンテーターの方々にコメントをいただいた上で、ここに集まった皆が問題を絞り、沖縄の諸問題と突き合わせて、来るべき近い未来に沖縄及び沖縄周辺について深く考える者同士として再会できる機会が訪れればいいなと思っております。

私個人は、文学部で比較文学として旧植民地地域の文学や、複数言語・複数文化が存在している地域を中心に研究しています。沖縄の文学に関しても同系列の諸問題を含んだ作品群として付き合うことがあります。私自身の関心は、沖縄県に住む人々はもちろんのこと、かつて沖縄県や琉球地域に住まれた歴史的な人々、さらには沖縄の基地から飛んでいった軍用機もあれば、今、那覇空港の国際線もあるわけですが、その乗客やクルーの人々にとっての沖縄、あるいはアメリカ海兵隊でかわりをもっている軍人・家族にとっての沖縄が持っている多様な全体像に個人的には関心があります。

琉球政府に自治権が与えられ、その数年後、こんどは正式に本土返還が行われた時期に「日の丸・君が代」に大きな希望を抱いた人々が現実存在した。そういう人々の記憶を、国旗・国歌法が制定された今こそ、この時点で我々がどんなふうに継承できるのかということをこのごろはしみじみ考えることが多いわけです。来月には沖縄サミットが開催されます。日本という国家に希望を託して生きていきたいのに、希望を持つまもなく幻滅ばかり味わっている。希望が萎える瞬間に慣れ親しんでいる。そういう人間が、ことさら沖縄に興味を持ってしまうのは、おそらく希望に飢えていることだろうと思います。こうした私自身の関心を皆さんにも共有できる場所はしていただいて、共に考える機会としていきたいと思っております。